

金戸の動植物類

平成二十三年七月に子供会の合宿で金戸の生き物をみんなて調べようと話し合ったことがあった。大人は基盤整備や農薬散布で昔の生き物はいなくなつたと思つていたが、子供達に金戸で見たことがある生き物を出し合つてもらうと、思いがけず多くの生き物の名前が次なら次と出てきた。大人は小さな生き物には無関心だが子供達は通学途中や遊びでいろんな生き物を目にしているのであつた。

金戸は村中嶋・川原嶋・中地山の三地区でなるが、村中嶋や川原嶋は水田が主で動植物が生息し植物が自生する場所は皆無にちかいものがある。中地山も京塚・雁巻島あたりの畑地に幾ばくかの植物が自生するだろうと思われた。そして山田川や大井川の河川にはなにがしかの動物が生息するであろう事は想像された。

しかし子供達は、三方コンクリートされた用排水路や家庭菜園の「せんだい」の中に小さい動植物を多く発見していたのであつた。

戦後まで金戸の北側は山田野原野に連り鬱蒼とした叢林が迫つていた。その一部は北陸荘や国広に残つていて、明治初期の地図に海拔一四〇メートル前後、丘陵があちこちにある高低差ある村であつた。竹林や茅場や雑木林が繁り、高台の東頭・源元・朝日・山本土石一帯は桑林である。それらは昭和四〇年代末の基盤整備まで開墾されて田んぼに改良された。

また専徳寺周辺は竹林・雑木林であつたが対象外であつたので、現在もホタルの舞う川、竹の子取れる竹林、狸・キジ・ムササビ・リス・テン(トバ)などが生息し、多様な草花やカブトムシの捕れる木々が植栽する雑木林として残つた。

金戸だけの動植物があるわけでもないが、遷宮四〇〇年以上の金戸神明社の社叢や残された叢林や立野ヶ原(京塚・雁巻島)で自生する植物や生息する小動物を調べることにした。



カワニナとゲンジボタル

金戸でホタルが乱舞する場所が専徳寺背戸の中仙道川と竹林、品川正雄背戸の町川、山田川沿いにあるが、平成になり家庭周辺にも多く見られるようになった。

カワニナを食べて成長するが、幸いに町川・中仙道川の川底に砂地の場所がありカワニナが生息している。さらにはほたるはサナギになるには地面の間を潜つていき、土繭を作るので腐食しているやわらかな土が必要である。また土繭が出来るまで落葉が積もり、雨が降らなくても湿った状態が保てる場所や羽化した雌が潜んでいる草むらも必要である。それらの条件を満たす場所が村内に増加しているようだ。



タニシとシジミ

農薬の掛かる田んぼにはいないのに一枚隣の無農薬の有機米を生産する金戸の田んぼにはマルタニシがいつばい生息しているのに驚く。大小のタニシがまき散らしたように動いている。タニシは冬期には深い所の泥底で越冬するが、雌の親貝の体内にそろばん玉のような形でいる。春になると親貝は泥から這い出して六から八月に幼貝を産むが無農薬の田んぼでは幼貝が成長できるので多量に発生したように見えるのである。昔は食用にしたと云う。



種類は不明だが現在でも専徳寺の池にいるし各家庭の池にもいる。シジミは金戸地内では絶滅したと思われていたが、用水から各家庭の池に取り入れる管理柵にシジミが多量に生息している



場所が増えていいる。毎年用水の管理柵の泥をあげる中にシジミの殻が多く見られるようになった。

基盤整備前にあつた長堤にはカラスガイがいて食用にもした。外見は二枚貝で大型で厚く、殻長は普通は一五センチ程度である。色は黒褐色（若い貝では緑褐色）で産卵期は三月と七月で平野部の湖沼や灌漑水路などに生息したが、金戸では現在では専徳寺境内の池にいる。



カタツムリ

家庭の庭先で見えるカタツムリは多くの種類が有るのを知っていますか。

「カタツムリ」という語は日常語であつて特定の分類群を指す。殻が退化したものやナメクジ科の一種殻のないものを大雑把に「ナメクジ」と総称し、殻を持つものを「カタツムリ」「デムデンムシ」「マイマイ」などと呼んでいる。日本で一般にカタツムリと呼ばれるものとしてはオナジマイマイ科やニッポンマイマイ科の種類が代表的なものであるが、カタツムリをマイマイ

と呼ぶのは、東京地方に主力をもつ方で学術上の和名に採用されたからである。貝の渦巻き状のすじの「巻き巻き」から付いたという。

カタツムリには貝が左巻きと右巻きがあり学名が違う。左巻きはヒダリマキマイマイと呼び稀少である。右巻きはノトマイマイ等と呼ぶが多くが右巻である。

ヒダリマキマイマイは乾燥に弱く川の近くで湿度が高いじめじめした場所の雑草や灌木に生息している。ノトマイマイは林や庭木や川周辺のいたる所で見られる。

ヒダリマキマイマイやノトマイマイは大きなカタツムリであるが、それより小さい種類も多く見ることが出来る。ニッポンマイマイ・ヤマタカマイマイ・ウスカワマイマイ・オナジマイマイ・ヤマタニシ・オオケマイマイなどがいるので探して見てください。



右巻と左巻のカタツムリ



ナメクジ